方言から言語へ
――ルクセンブルク語形成をめぐって――

田原　憲和*

0. はじめに

現在のルクセンブルクにおいて、ルクセンブルク語はフランス語、ドイツ語と並ぶ公用語の1つである。ルクセンブルク語、あるいはこれら3つの言語の使用領域についてはこれまでも頻繁に調査、分析が行われてきた[1)]。とりわけ近年においては、ルクセンブルク語の使用領域が拡大する傾向にある。

しかしながら、「言語」としてのルクセンブルク語の歴史は浅い。確かに、「ことば[2)]」としては遥か以前から存在していたが、その位置付けはドイツ語ルクセンブルク方言としてのものであった。このドイツ語の一方言が「言語」として初めて明確に示されたのは、1984年に成立したいわゆる「言語法」においてである。これにより、ルクセンブルク語はルクセンブルク唯一の国語であり、3つの公用語の1つとして示されたのである。

こうした経緯から、ルクセンブルク語の「言語」としての成立年を挙げるとするならば1984年が最も適切であると考えられるが、「言語法」はルクセンブルク語に「言語」としての法的地位を与えたということに過ぎず、「言語法」成立前後でルクセンブルク語の実態が大きく変わったわけではない。もちろん、「言語法」が契機となって生じた変化もある。それでも、長期的に概観するならば、ルクセンブルク語は19世紀初頭か

＊　たはら・のりかず　立命館大学法学部准教授

ら現在にかけて徐々に「言語」として整備され、認識され、使用されるようになってきたと言える。

本稿では、ルクセンブルク語創出をめぐる様々な活動や社会情勢に焦点を当て、「言語」としてのルクセンブルク語成立過程を考察することを目的としている。

1. 方言と言語

一般社会において、「ルクセンブルク語はドイツ語の方言みたいなものだ」、あるいは「東北弁はまるで外国語のようだ」といった言説がみられることがある。言語Aを習得している者が言語Bを耳にした際、それがどの程度理解できるかどうか、すなわち、「言語Bが言語Aの標準語[3)]に近い言語体系を有する場合、言語Bは言語Aの方言といえる」という意識がこれらの言説の根底にある。しかしながら、言語間の距離が近いことは、言語Bが言語Aの方言であるという根拠にはならない。換言すると、言語の表面的な近さは方言であることを決定する要因にはならないのである。例えば、セルビア語とクロアチア語、チェコ語とスロバキア語、ヒンディー語とウルドゥー語などはかなりの程度まで相互理解が可能であるが、それぞれ別の言語とされている。一方で、中国語に対する広東語、日本語に対する琉球語は相互理解が困難であるが[4)]、広東語や琉球語はそれぞれ方言として認識されている。

言語Bが言語Aの方言であるかどうかを決定するのは、こうした言語間の距離に基づく言語学的根拠によってではなく、話者の言語意識に基づく社会言語学的根拠によってである。具体的には、話者が自らの言語の誤りを修正しようとする際に拠り所とする正しさの基準、あるいは、より公式な場面における言語使用の際に拠り所とする正しさの基準がどこにあるかという点によって、方言と言語の関係が決定されるのである。

例えば上述のスロバキア語については、1787 年にすでに規範化されており、また 1959 年から 1968 年にかけてスロバキア語辞書が編纂されている。チェコ語とかなりの程度類似しているとはいえ、こうした理由からスロバキア語はチェコ語の方言ではなく、個別言語であるといえるのである。

2. 初期ルクセンブルク語作家とその意識

2-1 非ルクセンブルク人によるルクセンブルク語活動

ルクセンブルク語が現在の形にまでその使用領域を拡大するきっかけをもたらしたのは、19 世紀初頭の 2 人の外国人、ハインリッヒ・シュタンマー（Heinrich Stammer）とゲオルク・ヴァイス（Georg Weiß）である [5]。

シュタンマーはドイツのボッパルト出身のドイツ語教師である [6]。1817 年から 1851 年まで、ルクセンブルクの中等教育機関である Athénée de Luxembourg のドイツ語教師を務めていた。彼はドイツ語教師であるが、1818 年と 1823 年に讃美歌集を自ら編纂し出版するなど、音楽にも長けていた。彼は音楽が学習促進に効果的であると考えており、また、語学能力を高めるためにはこうした感性が重要となるという考えを持っていた。

シュタンマー自身はルクセンブルク語での創作活動を行っていないが、このシュタンマーのもとで未来の作家が育つことになる。代表的な人物としては、1829 年に初のルクセンブルク語詩集 *E Schréck op de Lëtzebuerger Parnassus* を出版したアントワーヌ・マイヤー（Antoine Meyer）やドイツ語詩人として活躍したルートヴィヒ・マルシャン（Ludwig Marschand）が挙げられる。

マイヤーらはシュタンマーのドイツ語の授業の課題として創作に取り組んでいた [7]。そして彼らは卒業した後もシュタンマー主宰のサークル

に参加するなど、その絆は強かった。このポリヒュムニア団（Bund Polyhymnia）と名付けられたサークルでは、郷土愛や愛国心、友情を育むといった目標が掲げられていた[8)]。

こうしたシュタンマーの教育やサークル活動を通じ、数学者として活躍していたマイヤーがルクセンブルク語の詩集を出版することになる。シュタンマー自身は創作活動をしていないとはいえ、こうした人材を育てる土壌を作ったといえる。

一方のゲオルク・ヴァイスはプロイセン王国のブレスラウ出身で、シュタンマーと同じ1817年にルクセンブルクへやってきた。ヴァイスはルクセンブルクでドイツ語新聞 *Luxemburger Wochenblatt* を発行しており、この新聞がルクセンブルク語の歴史においても非常に重要な役割を担った。

マイヤーの詩集が出版された1829年よりも前の1821年4月14日、*Luxemburger Wochenblatt* 紙上で書き言葉としてルクセンブルク語が用いられた[9)]。方言と言語の外面的な違いの1つとして書き言葉としての使用の有無が挙げられるが、まさにルクセンブルク語が書き言葉として用いられるきっかけをもたらしたのがヴァイスの *Luxemburger Wochenblatt* であった。

この新聞は1821年4月7日から1826年7月8日まで5年余りにわたって毎週日曜日に発行されていた、ルクセンブルク初のドイツ語新聞である[10)]。発行者のヴァイス自らがこの新聞のほぼ全ての記事を執筆していた。また、ルクセンブルク語の記事についてもルクセンブルク人のジャン＝フランソワ・ガングラー（Jean François Gangler）[11)] の助けを得ながら執筆したとされる[12)]。さらに、シュタンマー門下生も自らの作品を *Luxemburger Wochenblatt* に寄稿していた。

ヴァイスによって執筆されたルクセンブルク語の記事は、かなり口語的な内容となっている。代表的なものとして1821年4月21日発行の第3号

に掲載された *Gespräche über das Luxemburger Wochenblatt*、1825 年 12 月 10 日発行の第 50 号に掲載された *Les derniers Vœux d'un Ivrogne*（*En patois de Luxembourg*）が挙げられる。いずれも地の文ではなく、全て発話を表現するためにルクセンブルク語が用いられている。これらは詩の形式をとっておらず、内容的にも特筆すべきものはないが、新聞で書き言葉としてルクセンブルク語が用いられたという点はルクセンブルク語の歴史において非常に重要な転換点と言える。

2-2　ルクセンブルク語作家とその活動

19 世紀初頭は非ルクセンブルク人のシュタンマーとヴァイスの活動の影響もあり、ルクセンブルク語による文芸活動が胎動しつつあった。既に述べたように、1829 年にマイヤーがルクセンブルク語による初の詩集を出版したのを出発点に、1830 年にはヤーコプ・ディーデンホーフェン（Jakob Diedenhoven）が風刺詩を、1832 年にはマイヤーによる 2 冊目の詩集 *Jong vum Schréck op de lëtzebuerger Parnassus* を発表する。さらに 1841 年にはガングラーが、1843 年にはフィリップ・クナフ（Philippe Knaff）がそれぞれルクセンブルク語の詩を発表する。

こうした一連の詩作に続き、1840 年代から 1850 年代にかけては言語としてのルクセンブルク語の記述が行われた時期である。1843 年にはマティアス・ハルト（Mathias Hardt）による、ルクセンブルク語に関する初の研究報告 *Vocalismus der Sauer-mundart* が発表された。その後、すでに述べたように 1847 年には初のルクセンブルク語辞典が編纂され、また、1854 年にはマイヤーにより初のルクセンブルク語正書法集が、翌 1855 年にはディックス（Dicks）[13] による正書法集が発表された。

ディックスの名が世間に出たのはこの正書法集が初めてだが[14]、その後は人気劇作家として広くその名を知られることとなる。1855 年 2 月 25 日初演の *De Schollscheîn* はルクセンブルク語による初の舞台作品であ

る。この作品は非常に高く評価され、新聞各紙にも好意的な記事が掲載された[15]。同年4月22日には*De Koséng oder Schwârz oder Blont*が、翌1856年には*D'Kirmesgèscht*の初演が行われた。また、1859年からミシェル・レンツ（Michel Lentz）[16]が音楽や詩など幅広い創作活動を展開する。

このように、1820年代から1850年代にかけては、まず非ルクセンブルク人の視点からドイツ語に対するルクセンブルク語の存在が意識され、そのルクセンブルク語を収録し記述しようとする動きになり、さらにそこから高い芸術性を持った言語として幅広い娯楽の言語として使用領域が広まっていった時代であった。

しかしながら、マイヤーやディーデンホーフェンなど最初期の詩人と、ディックス、レンツなどそれに続く世代とでは、ルクセンブルク語に対する意識が大きく異なっている。すなわち、マイヤーやディーデンホーフェン、あるいはヴァイスらは、ルクセンブルク語をあくまでも口語として、日常語として記述し、その視点の元で創作活動を行っていた。一方、ディックスやレンツは、ルクセンブルク語でより高いレベルの芸術性を伴った創作ができるという考えを持っていた[17]。ディックスはこうした創作活動と並行し、ルクセンブルクことわざ・慣用句集（1857-58）、ルクセンブルク童謡集（1877年）、ルクセンブルク伝承・伝説集（1882年）、ルクセンブルク風俗・慣習集（1883年）などを編纂し、出版している。こういう点からも、彼らはルクセンブルク語を単なる口語としてではなく、その背景に文化や歴史を見据え、創作活動を行っていたことがわかる。

3. ルクセンブルク語意識の国民への広がり

3-1　ルクセンブルク語なのかドイツ語方言なのか

19 世紀はルクセンブルク語が発見され、相対化され、使用領域が広まっていった時代であった。しかしながら、当時は誰もルクセンブルク語をドイツ語と並んで存在する個別言語としては考えていなかった。あくまでもドイツ語のルクセンブルクにおける表現形態、すなわち方言であるという認識からは広がっていなかった。換言すると、ルクセンブルク語は郷土あるいは郷土愛と結びつけて考えられていたものの、ルクセンブルクを国家あるいは愛国心と結びつけて考えられてはいなかった。例えばマイヤーは 1829 年の詩集の前書きで「我々の方言の」（von onsem Dialekt）という表現を用いている。一方、ディックスの正書法集のタイトルは「ドイツ語ルクセンブルク方言の正書法に関する試論」（*Versuch über die Orthographie der luxemburgischer-deutschen Mundart*）である。

この他にも、ドイツ語という枠の中でルクセンブルク語の使用領域を拡大しようとする動きはみられた。ガングラーのルクセンブルク語辞典が出版された後の 1848 年 4 月 28 日、ルクセンブルク中部のエッテルブルックで開催された議会で、マティアス・アンドレ（Mathias André）により、フランクフルト国民議会へ派遣する代表者がルクセンブルク語を使用することの可能性についての動議が出された[18]。ここでアンドレはフランス語で発言を始め、「国家の法律は方言で議論することを許している」と述べた後にルクセンブルク語に切り替えて発言を続けた[19]。結局この動議は、賛成 16、反対 56 の圧倒的多数で否決される[20]。ここでも、ドイツ連邦の意思決定機関であるフランクフルト国民議会という非常に公的な場面でのルクセンブルク語使用を主張しているにもかかわらず、その意識としてはやはりドイツ語の方言としてのルクセンブルク語が想定さ

れていたことがわかる。

また、ルクセンブルク語の使用領域がより公的な場面にまで広がる象徴的な事象として、1896 年 12 月 9 日にカスパー・マティアス・シュポー（Caspar Mathias Spoo）が国会で行った、国会でのルクセンブルク語の使用を求める演説がある[21]。しかしこのシュポーをもってしても、その演説の中で「我々のことばはドイツ語だ！」（Ons Sprooch as déi däitsch!）と語っている。

こうして、ルクセンブルク語の使用領域を拡大しようとする試みが続けられ、実際にそれが広がりつつあった 19 世紀においても、あくまでもドイツ語という枠内での議論であった。ドイツ語と切り離して個別言語としてのルクセンブルク語はまだ明確には想起されていなかったと言える。

3-2　ナチスによる国勢調査の失敗と民衆の国民意識の高揚

ルクセンブルク語作家や活動家たちにおいてもルクセンブルク語とドイツ語は切り離せないものであった。当然のことながら、一般民衆においてもこれは同様であり、ルクセンブルクはドイツ語文化圏であり、ドイツ語の方言としてルクセンブルク語を用いているという意識であった。当時の教育大臣であったニコラ･マルグ（Nicolas Margue）は、「民衆は、自らドイツ人として振る舞い、長年ルクセンブルク人のドイツ語と呼ばれている彼ら自身の言葉をフランス語に対して高く掲げることによって、自らのルクセンブルク性を証明しようとした」[22] と指摘している。

小川（2015）でも指摘されているように、ルクセンブルクの国民意識が高まったのは 1940 年から 1944 年にかけてのナチス・ドイツ支配が契機となった[23]。とりわけ、1941 年 10 月 10 日の国勢調査がルクセンブルク人の国民意識、言語意識に関して決定的な結果をもたらした。この国勢調査では氏名や生年月日などの一般的な項目のほか、国籍や母語、民

族の項目も設けられていた。ナチス・ドイツの目的は、これらの項目を全てドイツ（deutsch）と書かせることで、ルクセンブルク併合とドイツ化の正当性を確保することであった。そのため、例えば母語の項目では、1つの言語だけを書くこと、そしてドイツ語、イタリア語、フランス語、ポーランド語のようなものが母語であり、ルクセンブルク語、低地ドイツ語のような方言は母語ではないという内容の注意書きが添えられていた。しかしながら、96% 以上の住民がこれらの項目に全てルクセンブルク（lëtzebuergesch）と書く準備をしていることが判明したため、この国勢調査は急遽中止されるという結果に至ったのである[24]。

こうして、マイヤーによる初のルクセンブルク語詩集の出版から100年余り経過し、ようやく国民の間にルクセンブルク、ルクセンブルク語、ルクセンブルク人の三者が互いに完全に重なり合うことになるのである。

3-3　正書法をめぐる動きとドイツ語の維持

書き言葉としてのルクセンブルク語の使用領域を拡大しようとする際、避けては通れない問題がある。正書法の確立である。これはとりわけ教育への導入にあたっては決定的な問題となる。

ルクセンブルク語の正書法については、19世紀を通じてディックスの正書法を簡略化したディックス・レンツ正書法[25]が広く使用される。しかしながら、1890年代には他にも多くの正書法が提案される。その舞台となったのがOns Hémecht誌上である。例えば1895年第7号から1896年第12号まで連載されたピエール・ブール（Pierre Bourg）の「ルクセンブルク人の方言」、1897年第1号のジョゼフ・ヴェーバー（Joseph Weber）による「ルクセンブルク語の正書法について」、1897年第2号から第5号に連載されたカール・コーン（Karl Kohn）による「ルクセンブルク人の方言の正書法への付言」などがある。

20世紀に入っても確立された正書法がない状態が継続していたが、

1912 年にルクセンブルク語が初等教育に義務教育として導入されることを契機に、ルクセンブルク政府は作家でドイツ学者のルネ・エンゲルマン（René Engelmann）に正書法の創出を委託した。その結果、1916 年に新しい正書法が発表され、急速に広まることとなる。しかしながら、この正書法はドイツ語正書法の習得を前提に創出されたものであるため、ルクセンブルク語の独自性という意味では弱い面もあった。

そうした中、すでに述べたように、ナチス・ドイツによる占領を経験した住民たちが急速にドイツやドイツ語から距離を置くようになり、それと反比例するかのようにルクセンブルク人としての、そしてルクセンブルク語という意識が急速に高まっていた。

ルクセンブルクがナチス・ドイツの占領から解放された 1944 年、政府は完全にドイツやドイツ語と切り離されたルクセンブルク語の確立を目指した。当時の教育大臣であったマルグは、英語学者で音声学者でもあったジャン・フェルテス（Jean Feltes）に正書法の作成を依頼する。これがマルグ・フェルテスの正書法と呼ばれるものである[26)]。

しかしながら、結果的にはこの正書法改革は失敗に終わる。マルグ・フェルテスの正書法は音声に忠実であるため、従来の綴り方から大きく乖離し、その習得には一定の努力が必要なものであった。そして、これは多くのルクセンブルク人の意識からも大きく乖離していた。ナチス・ドイツによる占領という悲劇的な歴史を経験したものの、ルクセンブルク人がまず習得するのはドイツ語の正書法であり、その知識があるからこそ新たに学習し直すことなくエンゲルマンの正書法を理解できていたという背景がある。また、学校教育に導入されたと言ってもルクセンブルク語を学ぶのは週 1 時間のみであるため、子供達にとってもドイツ語に基づく正書法が好都合であったのである。

こうして、マルグ・フェルテスの正書法は法的には公的な地位を保持し続けるものの、現実にはエンゲルマンの正書法が引き続き使用される

こととなった。

第二次世界大戦後のルクセンブルク人は、ドイツやドイツ語に対して嫌悪感を抱いていたにもかかわらず、これを完全に捨て去ることはできなかった。この当時も学校教育においてはドイツ語とフランス語の両言語の習得が目指されてきたが、とりわけ庶民にとっては母語に近い体系をもつドイツ語の方が容易であり、アクセスしやすい言語であった。また、庶民の多くが読んでいたのはドイツ語の新聞であったことから、第二次世界大戦以降、ドイツ語の公用語としての地位を見直す動きも見られたものの、現在に至るまでその地位を保持している。

こうして、ルクセンブルク人の一時的な、しかし劇的な対ドイツ（語）感情の悪化という過程を経たものの、公用語としてルクセンブルク国内においても、あるいは正書法の面でルクセンブルク語の内部においても、二重の意味でドイツ語はルクセンブルク（語）に残ったのである。すなわちそれは、個別言語としてのルクセンブルク語の確立への道のりが険しいことを示していた。

しかしながら、すでに述べてきたように、仮にルクセンブルク語とドイツ語の正書法がそれぞれ類似していたとしても、そのこと自体はルクセンブルク語の方言認定とは別次元の問題である。ルクセンブルク語を記述する際、その正しさの基準がドイツ語の正書法にある、あるいはそのように意識され続ける限り、ルクセンブルク語とドイツ語の方言関係について完全に否定することはできないのである。

4. 書きことばとしてのルクセンブルク語の広がり

4-1 正書法の確立

マルグ・フェルテスの正書法は失敗に終わったが、その直後の 1948 年にいったん解散していた辞書委員会が再結成される[27]。その後、1950 年

にルクセンブルク語辞典の第1巻が刊行された[28]。この辞書の冒頭に、新しく開発された正書法が示されていた。そしてその最後に、「ここで挙げている十規則から外れる特殊な例はその都度決定する」としている。つまり、この時点ではまだ正書法は未完成であった。それでも、これが少なくともこの時点では最も権威を持った正書法であった。ルクセンブルク語辞典の編纂が終了した1975年になって、ようやくこれが公式に発表された。すなわち、この時点で公的な正書法であるという政府からのお墨付きを与えられたのである。その後、1999年に若干の修正が施された。これが現在の公式なルクセンブルク語正書法である。

4-2　文芸活動の広がり

ルクセンブルク語を国語及び公用語にするとした言語法が成立したのは1984年のことである。それと前後して、ルクセンブルク語による文芸活動も広がりつつあった。

この時代において、ルクセンブルク語の確立や普及に最も寄与したのは、ルクセンブルク語擁護団体のAktioun Lëtzebuergesch（以下「AL」）である。ALは1971年に設立された団体で、ルクセンブルク語による機関誌*Eis Sprooch*の発行や、外国人のためのルクセンブルク語講座の開講、新聞に掲載する死亡記事（広告）をルクセンブルク語で書くことの推奨など、多方面にわたって活動を続けてきた。

こうした中で、文芸活動の面で最も活躍した人物の一人としてあげられるのが、ジョジー・ブラウン（Josy Braun）である。ブラウンは言語法成立より前の1978年に彼にとっての初のルクセンブルク語詩*loost de mound do wou en ass*を発表した。その後は、主としてルクセンブルク語で創作活動を行った。この時代には他にもルクセンブルク語で盛んに文芸活動を行った作家がいるが、その生涯を通じてほとんどの作品をルクセンブルク語で創作したという点で、ブラウンは他の作家たちと一線

を画する存在である。

ギ・レヴェニヒ（Guy Rewenig）はブラウンより前の1975年に初めてルクセンブルク語の作品を世に送り出した。それが、ルクセンブルク語戯曲 *Biergerkrich. E Steck aus den hënnescht Reihen* である。レヴェニヒはルクセンブルク語以外にもドイツ語やフランス語でも創作活動を行っていた。レヴェニヒはブラウンと異なり、言語にとらわれずに創作活動を行ったという点で特徴的である。とりわけ、ルクセンブルク人及びルクセンブルク在住の作家に与えられるルクセンブルク文学賞を生涯で16回も受賞している。これは、上述のブラウンが3回の受賞、次に言及するマンダーシャイトが2回の受賞に留まっている点と比較しても、段違いに高い評価を受けていたことがわかる。

ロジェ・マンダーシャイト（Roger Manderscheid）は1963年からドイツ語で多くの作品を創作し、世に送り出していた。1986年に初のルクセンブルク語抒情詩 *mam velo bei d'gëlle fra. Gedichter a prosastécker handgeschriwen a gezeechent* を発表した後は、ルクセンブルク語でも多くの作品を創作し続けた。ブラウンやレヴェニヒと比較するとその貢献度は見劣りするが、ルクセンブルク語でも多くの作品を残し、ルクセンブルク語文芸活動の興隆に大きく貢献した人物の一人である。

また、上述の3人らによる文芸活動とはやや性質を異にするが、ルクセンブルク語聖書の存在も、「言語」としてのルクセンブルク語の成立を見ていく上でまた重要である。

ルクセンブルク語新訳聖書 *Evangeliar* は2009年、当時の大司教の名で出された。これはギリシャ語から翻訳したもので、多くの司教がこれに関わっていた[29]。まだこの聖書がルクセンブルクの教会で広く用いられているとは言い難いが、国民の信仰の源泉である聖書にまでルクセンブルク語が広がったということは特筆すべき事象と言える。

5. 現在のルクセンブルク語の位置づけ

現在のルクセンブルクでも、義務教育でのルクセンブルク語の学習時間は少ないままであり、基本的には1週間あたり1コマの授業にとどまっている。しかしながら、ルクセンブルク語が持つ意味は以前と比較してはるかにその重要度を増している。2015年度現在の3歳のプレコースから小学校6年生までの子供で、ルクセンブルク国籍の子供が54.3%、外国籍が45.7%となっている[30]。また、第一言語がルクセンブルク語ではないという子供は、ルクセンブルク国籍の子供で33.4%、外国籍の子供で99.1%を占め、全体では63.5%の子供がルクセンブルク語以外を第一言語として使用している。ルクセンブルク語以外の言語の内訳は公開されていないが、その国籍から多くはポルトガル語やイタリア語、フランス語などのロマンス語であることが推測できる[31]。

小学校は基本的にドイツ語で授業が行われる。ルクセンブルク語を母語とする子供たちはドイツ語での授業に比較的容易に対応できるが、そうでない子供たちにとってこれは大きな障害となる。そのため、2年間の幼稚園を義務教育とし、そこでのルクセンブルク語習得を目指している。こうしたことから、現在のルクセンブルクにおいては、ルクセンブルク語は小学校の教育への橋渡しとしての役割も担っているといえる。

また、このように外国人が占める割合が多いため、ルクセンブルク語は国民統合のアイデンティティをもたらすという側面もある。政治家が国民に語りかける際には、多くの場合ルクセンブルク語が選択されるし、ルクセンブルクの各政党が運営しているウェブサイトやFacebookページでもかなりの割合でルクセンブルク語が使用されている[32]。また、ルクセンブルク国籍を取得する際にもルクセンブルク語会話力評価試験に合格することが条件の1つになっている。

ルクセンブルクでは十分なフランス語能力さえあれば問題なく社会生

活を営むことが可能である。しかしながら、国語であるルクセンブルク語の能力を有することが、ルクセンブルク人であるための１つの条件であるといっても過言ではない。ここには、かつてのルクセンブルクにおいて避けては通れなかった問題、すなわち、ルクセンブルク語とドイツ語の類似度の高さや、ルクセンブルク語はドイツ語の方言であるかどうかという議論は、もはや一切問題になっていない。むしろ、ルクセンブルク語がドイツ語に類似しているということから、小学校の教育言語であるドイツ語への橋渡しとしてルクセンブルク語が活用されている。ドイツ語と類似していることが、現在においてはルクセンブルク語の存在意義を示す大きなメリットとなっている。現在のルクセンブルク人にとってのルクセンブルク語は、意識の上ではもはや完全にドイツ語とは異なる「言語」であるといえる。

6. まとめ

ルクセンブルク語はその地理的特性からフランス語由来の語彙が比較的多いものの、本来はドイツ語の方言であり、話者もそれに疑いを持っていなかった。しかしながら、19 世紀から現在にかけて、ルクセンブルク語による文芸活動や政治面での影響から、徐々にその使用領域が広まってきた。それは、話し言葉としてより公的な場面で用いられるようになっただけでなく、戯曲や詩、文学の言語としても発展を続けてきた。

言語的側面から見ても、ルクセンブルク語辞典の刊行をはじめ、ルクセンブルク語正書法の確立、文法面での記述や整理など、個別言語としての要件を満たしてきた。

かつて、独立した「言語」としては一見すると大きな障壁となっていたドイツ語との類似性も、現在のルクセンブルクにおいてはもはやその類似性とは無関係に個別言語としてルクセンブルク語と認識されており、

そこにはもはやドイツ語の方言であるかどうかという議論はない。ルクセンブルク語は、短期間でドイツ語の一方言から独自の言語として整備され、認識され、使用され、そして急速に話者に浸透した稀有な言語であると言える。

注

1）代表的なものとしては、Berg（1993）や木戸（2016）などが挙げられる。

2）本稿での「ことば」は、ある特定の言語体系の総体を意味しており、ソシュールのいう「ラング」に相当する。

3）ここで「標準語」（Standardsprache）という表現を用いることは本来であれば好ましいことではない。正確には「標準変種」（Standardvarietät）とすべきであろう。

4）もちろん現在の日本において、琉球語話者もいわゆる標準日本語を理解可能であるが、これは標準日本語の知識を獲得した結果である。

5）両者の活動については田原（2018）に詳しい。

6）シュタンマーの経歴等については、Mannes/Muller（2009）S.6-24 を参照。

7）1820 年の試験ではルクセンブルク語で物語や歌を創作するという課題が与えられていた。【Mannes/Muller（2009）S.90】

8）Muller（2004）S.29 参照。マイヤーらルクセンブルクを離れていたメンバーも年に 1 回ルクセンブルクに集まり、参加していた。

9）*Luxemburger Wochenblatt* に掲載された記事については、田原（2014）S.74-75 に詳しい。

10）当時のルクセンブルク市の人口は 1 万人余りで、それに加えて 6000 人規模のプロイセン軍が駐屯していた。*Luxemburger Wochenblatt* は駐留プロイセン兵も購読者の対象としていた。【Hilgert（2004）S.41】

11）ガングラー自身もルクセンブルク語史においては重要な役割を担っている。1840 年にルクセンブルク語詩集 *Koirblummen um Lamperbiéreg geplekt* を、1847 年には初のルクセンブルク語辞書である *Lexicon der Luxemburger Umgangssprache* を出版した。

12）Muller（2004）S.111 参照。

13）ディックスは本名を Edmond de la Fontaine という。生前はとりわけ劇作家

として有名であり、現在でもルクセンブルクの三大詩人の1人に数え挙げられる。

14）実はディックスは1848年、Volksfreund誌上において匿名で*D'Vullparlament am Grengewald*という詩を発表している。この詩は国会議員らを滑稽に描いた風刺詩であり、その対象の1人が当時国会議員を務めていたハルトである。なお、これが匿名だった理由は、当時のルクセンブルクの首相がディックスの父Gaspard Théodore Ignace de la Fontaineだったからとされる。【Hurt（1938）S.144】

15）新聞各紙による評価については、Goetzinger et al.（2009）S.111に詳しい。

16）レンツもまたディックスと同様にルクセンブルク三大詩人の1人として讃えられている。

17）こうした指摘は、例えばHoffmann（1933）S.9にもみられる。

18）Goetzinger et al.（2009）S.109-110. なお、この時はそれが実現しなかった。

19）一連の顛末については、1848年4月30日発行の*Luxemburger Wochenblatt*第12号に詳しく示されている。

20）反対票を投じた議員も、高地ドイツ語を用いるべきであるという意見とフランス語を用いるべきであるという意見が入り混じっていた。なお、前述のハルトは高地ドイツ語の使用を主張し、この決議には反対票を投じている。

21）この時は反対多数で否決された。

22）Margue（1937）S.10. なお、日本語訳は小川（2015）S.65による。

23）なお、小川によるとナチス・ドイツのモーゼル大管区長官がルクセンブルクでのフランス語の使用を禁止し、ルクセンブルク語をドイツ語の方言の1つであると位置付けたことも、ルクセンブルク人の結束意識を高めることになったということである。【小川（2015）S.17】

24）このエピソードは多くの研究者によって言及されている。例えばトラウシュ（1999）S.165、Hoffmann（1979）S.36、小川（2015）S.17などがある。

25）ディックスの正書法の簡略版をレンツも使用していた。そのため、一般にこの正書法は両者の名前を冠してディックス・レンツ正書法と呼ばれることになる。

26）マルグ・フェルテスの正書法については、小川（2015）S.59-60で詳細に解説されている。

27）辞書委員会の設立や再結成の経緯、その活動の概要については、小川（2015）S.58, S.67-77に詳しい。

28）ルクセンブルク語辞典（*Luxemburger Wörterbuch*）はその後第23巻まで編纂され、1975年にようやく完成した。

29）ルクセンブルク語聖書については、木戸（2016）に詳しい。

30）数値はルクセンブルク政府が発行している公式の統計資料Ministère d'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse（2017）S.9に基づいている。

31）公式の統計資料によると、3歳から小学校6年生までの子供のうち、23.1%がポルトガル国籍、5.4%がフランス国籍、1.6%がイタリア国籍である。なお、ベルギー国籍は2.0%、ドイツ国籍は1.4%である。

32）ただし、ウェブサイトに関していえば、ルクセンブルク語が使用されているのは項目や見出し、あるいはスローガンなどにとどまり、具体的な政策集はドイツ語で書かれていることが多い。

参考文献

Berg, Guy（1993）*Mir wëlle bleiwe, wat mir sin.* Max Niemeyer Verlag, Tübungen.

Goetzinger, Germaine / Muller, Roger / Sahl, Nicole / Weber, Josiane（2009）*Ech sinn e groussen Hexemeeschter. 1823-1891 Dicks.* Centre national de littérature, Mersch.

Hilgert, Romain（2004）*Zeitungen in Luxemburg 1704-2004.* Service information et presse du gouvernement luxembourgeois, Luxemburg.

Hoffmann, Fernand（1979）*Sprachen in Luxemburg. Sprachwissenschaftliche und literarhistorische Beschreibung einer Triglossie-Situation.* Franz Steiner Verlag, Wiesbaden.

Hoffmann, Fernand（1993）Michel Lentz, Volkslehrer und Volksdichter. In: *nos cahier. Nr.3.* S.5-33.

Hurt, Joseph（1938）*Theater in Luxemburg*. Jong-Hémecht, Luxemburg.

Mannes, Gast / Muller, Roger（2009）*Heinrich Stammer und der Bund Polyhymnia.* Centre national de littérature. Differdange / Mersch.

Margue, Nicolas（1937）*Die Entwicklung des Luxemburger Nationalgefühls von 1780 etwa bis heute.* St. Paulus, Luxemburg

Ministère d'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse（2017）

Statistiques globales et analyse des résultats scolaires. Année scolaire 2015/2016. Service des statistique et analyse, Luxembourg

Muller, Roger（2004）War der Initiator lëtzebuergescher Dichtung ein Nichtluxemburger? In: *nos cahier. Nr.2.* S.81-114.

小川敦（2015）『多言語社会ルクセンブルクの国民意識と言語－第二次世界大戦後から 1984 年の言語法、そして現代－』大阪大学出版会。

木戸紗織（2016）『多言語国家ルクセンブルク：教会にみる三言語の使い分けの実例』大阪公立大学共同出版会。

田原憲和（2014）「アントワーヌ・マイヤーとルクセンブルク語」『立命館経営学』第 52 巻 第 4・5 号、立命館大学経営学会。73-92 頁。

田原憲和（2018）「非ルクセンブルク人がルクセンブルク語創出に及ぼした影響について」（印刷中）『国際言語文化研究』第 29 巻 第 3 号、立命館大学国際言語文化研究所。